

ビワ生育情報

千葉県
平成20年3月号

平成20年2月の気象

平成20年2月の半旬別の気象は表1に示した。平均気温は第5半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、中でも第3半旬は平年より2.6 低かった。月平均気温は4.7 で、平年より1.6 、前年より3.6 低かった。

氷点下日数は第5半旬を除く全ての半旬で見られた。月合計は18日で、平年より9日、前年より14日多かった。

最低極温は第5半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、2月14日には-3.3 を記録し、この冬一番の冷え込みであった。

降水量は第1及び第3半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、第4及び第5半旬は降雨がなかった。月合計は67mmで平年の73%、前年の89%であった。

日照時間は全ての半旬で平年と同じか上回った。月合計は203時間で、平年の1.3倍、前年の1.2倍であった。

表1 平成20年2月の気象 (暖地園芸研究所)

半旬	気温()			氷点下日数(日)			最低極温()		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	3.4	5.2	7.3	4	2.1	2	-2.3	-1.7	-1.5
2	3.8	6.3	10.0	2	1.9	0	-2.2	-1.5	0.8
3	4.1	6.7	9.4	4	1.8	0	-3.3	-1.5	0.6
4	3.8	6.2	6.9	5	1.4	1	-2.5	-1.1	-0.4
5	6.8	6.7	7.7	0	1.3	1	0.0	-0.5	-0.7
6	6.8	7.2	8.3	3	0.9	0	-1.9	0.2	1.1
平均/計/最低値	4.7	6.3	8.3	18	9.2	4	-3.3	-3.3	-1.5

: 2月の過去34年間の最低極温の平均

半旬	降水量(mm)			日照時間(時間)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	41	12	0	30	29	45
2	6	13	0	28	28	23
3	11	9	13	33	27	33
4	0	27	36	40	26	13
5	0	20	17	50	26	30
6	9	11	9	22	16	26
合計	67	92	75	203	151	171

4月の作業 (果実の発育は次ページ)

4月になると平均気温が一段と高くなって枝葉・根ともに伸長が盛んな時期になり、果実の肥大も急速に進む。前月に続き、摘果・袋掛けが重要な作業になり、今月中には終えたい。

摘果・袋掛け

寒害が見られる園では、生死の判別がしやすくなった頃から摘果を始める。果形が細長く、果皮に張りがないものは寒害果の可能性が高い。外観と被害果の関係を見極めてから効率よく摘果作業を進める。

がんしゅ病の予防

袋掛けが終了した後、収穫が始まるまでに防除指針に従って銅剤を予防散布する。幹や

枝に薬液が充分にかかるようにする。

除 草

春草が繁茂する時期になるので、収穫が始まる前に除草をすませる。草生栽培園では、有機物を補給する意味で草を刈り取って樹冠の回りに敷くとよいが、労力の足りない場合は除草剤を利用する。

花房及び果実の発育

ビワの開花期は表2に示した。暖地園研の開花始期は、「楠」及び「田中」は平年より3日早かったが、前年より4日及び1日遅かった。「大房」は平年と同じであったが、前年より1日遅かった。開花盛期は、「楠」は平年より6日早かったが、前年より4日遅かった。「大房」は平年より1日、前年より5日遅かった。「田中」は平年より5日、前年より1日早かった。開花終期は「楠」が12月17日、「大房」が2月12日、「田中」が1月9日であった。「楠」及び「田中」は平年より16日及び7日、前年より39日及び35日早かった。「大房」は平年より13日遅かったが、前年より13日早かった。

本年は花房の出蕾が平年より早く、12月の気温が平年よりやや高かったので、開花の進みは、「楠」及び「田中」が平年より早かったが、「大房」は開花の終了が平年より遅れた。

表2 ビワの開花期 (暖地園芸研究所)

品 種	開花始期(月・日)			開 花 盛 期			開 花 終 期		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11. 7	11.10	11. 3	11.24	11.30	11.20	12.17	1. 2	1.25
大 房	11.25	11.25	11.24	12.23	12.22	12.18	2.12	1.30	2.25
田 中	11.11	11.14	11.10	12. 4	12. 9	12. 5	1. 9	1.16	2.13

平年：1982年～2006年の25年間の平均

2月29日時点で寒害の被害をまぬがれたビワ幼果の生存率は表2に示した。樹冠外側の生存率は「楠」が47%、「大房」が70%、「田中」が71%であった。いずれの品種も平年及び前年より低かった。樹冠内側の生存率は「楠」が100%、「大房」及び「田中」がそれぞれ98%であった。いずれの品種も平年より高かったが、前年と同じか低かった。樹内外の平均生存率は「楠」が69%、「大房」が82%、「田中」が83%であった。いずれの品種も平年及び前年より低かった。

暖地園研では2月29日までに最低極温の - 3 以下の日が2回あり、本年は開花の進みが「大房」を除いて平年より早く、発育の進んだ幼果が多いため、寒害の被害程度は平年よりやや多かった。

果房は充実して樹の生育も順調である。また果樹カメムシ類の越冬量は、南房総市他県南地域で平年並で、本年は発生が少ない前年より多いと予測しており、カメムシの発生の多い園では、4月以降ビワ園への飛来に注意を要する。

表3 ビワ幼果の生存率 (暖地園芸研究所)

品 種	樹冠の外側(%)			樹冠の内側			平 均		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	47	59	100	100	92	100	69	74	100
大 房	70	83	100	98	93	100	82	87	100
田 中	71	83	100	98	97	100	83	89	100

調査：2月末日

平年：1998年～2007年の10年間の平均

【生育情報の問合せ先：千葉県農業総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 電話0470-22-2961】

果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生産技術に関する情報」でもご覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/nourinsui/>